



海と環境 海が変わると地球が変わる

日本海洋学会編 講談社 2001年9月発行
A5判 254ページ(カラー口絵4ページ)
2,800円(税別)
ISBN 4-06-155212-0

本書は表題のように地球環境と海のかかわりをさまざまな面から扱っている。地球環境変動、特に温暖化を中心とした地球環境問題に関連して海洋の役割が大きな関心をもたれている時に、多くの人に読んでもらいたい本である。

構成は以下の4つの章で、それぞれの章はさらに10-12ページの5節からなっている。

1. 将来予測は海洋から
2. 海洋が支配している地球環境変化
3. 海洋の炭素サイクルと環境変化
4. 海洋生態系と地球環境変動の相互作用

過去の地球の環境変動から自然の環境変動要因を探る研究、海洋と全球気候との関係や予測研究、海洋炭素循環の研究、そして、海洋生態系の環境変動との関連研究について、話題の紹介を節ごとに気鋭の研究者が担当した20項目(節)である。順に従い読む方が理解しやすいが、それぞれの節は独立しており、気になる表題の節を選んで読んでも十分な内容で楽しむことができる。

個人的感想かもしれないが、「大気中の二酸化炭素少ない氷期の海」(1・4節)と「炭素はめぐる」(3・1節)は地球環境の問題での海洋の役割を理解するのに大いに助けになる良い概説のように感じた。また、海洋生態系の問題を扱った第4章は、温暖化をはじめとする環境変化への生物/生態系の応

答が注目すべきこれからの課題であることを示している。地球環境変動との直接的な関係は十分にまだ解明されていないので、途上の研究の紹介が記述されている。赤潮といった地域環境汚染と捉えている問題も、実は地球温暖化により質的な変化が生じている可能性があるなど、興味深い内容を随所に発見することができる。

あとがきにも述べられているが、本書は海洋学会の60周年を記念して企画出版された。社会への海洋学の普及、特に、将来を担う若い人に海洋学の理解を深め、関心を持ってもらいたいという願いで作られている。10年前に同じく日本海洋学会編で「海と地球環境 海洋学の最前線」(東京大学出版会、1991年)が出版されている。これが、網羅的であったのに比べ、地球環境問題に焦点を絞り、節ごとが読み物として完結するものとした狙いがうまく実現している。「海」を知ることは地球の理解に不可欠なものであり、是非ともこの本に目を通し、「海」をとおして地球環境変動や環境問題について考えていただきたいものである。

本書で唯一気になることといえば、図についてである。それぞれの節で理解の助けになる図が多く挿入されていて、楽しめるものになっている。しかし、他の本からのコピーで、鮮明に見えないものがある(特にp.17, p.26, p.169の図)。カラーの口絵もあまり効果的でなく、口絵と見返しの図では、口絵4を除いて、参照ページが書かれていないのも不親切のように感じる。

東京大学海洋研究所のホームページ(<http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/japanese/index.html>)のTOPICS「大気CO₂が少なかった氷期の海」として、この本の第1章の4項と同じものを見ることができる。参考にされたい。

(西村 昭)